長洲町立長洲小学校　校長便り　№28

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和4年9月2日(金)

夏休み明け

夏休みが終わり1週間が過ぎました。夢の様な40日間を過ごした子供達は、少々お疲れ気味の様です。保護者の皆様、週末子供達は疲れも出るかもしれませんので、少しだけゆっくりさせてあげてください。

さて、これから秋が近づいてきますが、秋は何をするにしても良い季節ですね。「○○の秋」という言葉がありますが、何か一つ自分でテーマを決めてじっくり取り組むのはいかがでしょうか。これから数か月は実施される行事も多いのですが、それでも自分自身のための時間も大切にしたいものです。ストレス発散は、学習や仕事のモチベーションを上げてくれます。

私にとっての秋は、ここ数年、忙しいばかりで休みの日には家でゴロゴロというのが多く、今年こそはそうならないようにしようと気合を入れています。取り敢えず「読書の秋」と「趣味の秋」を楽しみたいと思います。

～作者に寄り添う～　読書の楽しみ

数年前、宮沢賢治の「やまなし」という童話の授業。宮沢賢治の精神性と、彼の執筆した作品との関係について、触れることがとても楽しいものでした。保護者の皆様は「注文の多い料理店」をご存知でしょうか。読んだ時は、私は猫を見ると思い出してしまって、身震いしたことを思い出します。「銀河鉄道の夜」は難しすぎて投げ出してしまったのですが、学生時代に初めて読破しました。暗い感じがして、「宮沢賢治って暗い人?」などと考えたものです。宮沢賢治は大変ナイーブな、繊細な心の持ち主だったようです。それが、作品に表れているのですが、どうも彼が生きた時代はそれを受け入れる懐の広さがなかったようです。現代、彼の作品は様々な形で見直されていることは周知の事実ですね。

さて、読書をするにあたって、その物語だけに集中するのも面白いのですが、もう二つの楽しみ方があると思います。それは、作者が作品を通じて読者に何を訴えているのか、それを探ることです。特に名作として現代に受け継がれている作品は、作者の生い立ちや考え方を探ると、非常に面白い読書ができると思います。宮沢賢治も然り、太宰治、夏目漱石、川端康成、三島由紀夫・・・。強烈な個性ばかりですね。最近の物語も面白いですね。恩田陸さんの「夜のピクニック」これはいつでしたか、本屋大賞を受賞した作品で青春小説ですが、恋愛などはなく、高校生が80㎞の「歩行祭」の中で色々な話をするだけなのですが、私が行ってきた「強歩会」と重なる部分も多く、共感的に読みました。この他に面白かったのは竹内真氏の「自転車少年記」これは親友同士の成長小説というか、私自身の経験と重ねることができてよかったです。城山三郎氏の「指揮官たちの特攻　幸福は花びらのごとく」これはとにかく平和について考えさせられます。日本人が、ここまで追い込まれてしまった理由が分かるような本でした。

読書について私見を述べましたが、読書は大切です。読んでいると作者がそばで話をしてくれているような気がしてきます。だから読書はやめられません。

シリーズ「自分を語る」#28

平成2年2月3日、午前3時頃の腹痛の件です。

初めは「食あたりかな?　トイレに行けば治るだろう。」と軽く考えていました。しかし、5分くらいの間隔で痛みが出ます。しかも痛みは酷くなるばかりです。あまりの痛さに、私は正露丸を飲みました。それでも痛みは治まらず、明け方になっても治まりません。両親も心配して起きてきました。まだ辺りは暗く、どのようなことが起こっているのか全く見当もつきませんでした。当時、私の家は汲み取り式の便所で、便の状態を確認することができず、事態を悪化させたようです。辺りが明るくなってきた時、初めて私は異常に気が付きました。トイレットペーパーに血が付いていたのです。実は、それまで下痢のように出していたのはすべて血液で、腸壁が出血していたのです。私の頭の中にすぐに浮かんだのは「赤痢」でした。腹痛を我慢しながら、焼酎で手を洗い、熱湯を便所に流しました。両親にはトイレを使わないようにと伝え、自分はすぐに隔離だと覚悟しました。両親は私の痛みの度合いを理解していませんでしたので、「取り敢えず病院に行け!」と余裕でした。近くの内科医院に受診しましたが、明確な判断も下されず、痛みが続き、眩暈がしてきました。私は、これはいかんと思い、タクシーで熊本市民病院に行きました。病院の先生は、熱は高くないので「赤痢」の可能性は否定されました。少しホッとしましたが、病名が分かりません。しかも、出血を放っておいたので、輸血の一歩手前まで血が薄くなっていました。眩暈や体の震えはそのためで、即入院となりました。それから暫くの間、24時間点滴が続くことになります。その日の夜、主治医から大腸内視鏡検査をすることを告げられ、本番を待つことになりました。教員として正式採用される2カ月前のことです。

次の日の朝、不思議と腹痛は収まっていました。腹痛どころか極度の空腹感に襲われるほどでした。「何か食べたいです。」と看護師さんに告げたのですが、当然答えはノーで、「検査が終わり次第何か指示が出るでしょう。」とのことでした。

その日の検査は大腸内視鏡検査です。現在でも定期的に検査を受けているのですが、この病院はこの検査を、眠くなる注射無しで行っていました。それはそれは痛いものでした。完全に覚醒した状態で、直径1．5㎝程の管が肛門から直腸、大腸と入ってくるのですからたまったものじゃありません。看護師さんは「口で息をしていてください。」と言います。とは言うもののそんなことができる訳なく、大声で叫ぶ私…。更に看護師さんは追い打ちをかけるように「おならはできる限りがまんしてね♡」私は「そんなことできる訳ないだろう!」と心の中で叫びながら、「プッ、ぶぅ～」と、おならを連発する始末…。どれくらいの時間検査していたのか分かりませんが、私には1時間にも2時間にも感じました。

検査後、ヘトヘトになって病室に戻りました。検査後は腹痛がありましたが、明らかに検査の影響による腹痛です。内視鏡検査は中を見やすくするために空気を入れるそうですね。それがおならの元だそうです。

病室で待っていると主治医が来られました。ここで病名が告げられました。

「急性出血性偽膜性薬剤性大腸炎」　病名、長っ!　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）